# 大学の課外体育に関する一考察（その1）

## ―― 一般学生の課外体育について ――

西尾貫一

今日，課外体育は正課体育とあいまって大学の体育を形成すると同時に，学生の課外活動においても，重要な位置をしめていることは周知の通りである。然し，現実には大学体育協議会の課外部会においても，厚生輔導専門研究会においても，「如何にして学生の課外体育を管理するか，どのようにして奨励するか，」ということについて数年来研究を続けてきていることからも推測されるように，体育の面でも，課外活動の面でも決して満足すべき状態にはなっていないのである。

一見，大学生はスポーツを愛好し，スポーツは盛んにおこなわれているようにみえるが，事実は必ずしもそうではない。種々の競技会が数多く実施され，学生選手が活動していることがマスコミによって報導されるので，あたかも大いにおこなわれているようにみうけられるのであって，実情は，学内でスポーツ活動に参加する学生の数，並に顔ぶれからみてもそれほど活況を呈しているものではないことが知られよう。このことは大学基準協会報36号に，「過去の経験からするならば弊害の伴う対外競技にはむしろある程度の管理・統制を必要とし，あまり普及していない学内体育活動には積極的な奨励援助を必要とするであろう[1]。」と指摘される所以のものであって，対外競技をおこなっている運動部についても，一般学生の課外におけるスポーツ活動についても，まだまだ検討すべき問題があるわけである。

大学の課外体育についてはこのように多くの問題があるが，今回は一般学生の課外体育について，特にその実践の実情と，不振の原因について夫々調査検討した結果を報告する次第である。

* KAN-ICHI NISHIO: A Study on the Extracurricular Physical Trainings in a University.

### I 一般学生の課外スポーツ活動

1) 調査方法

昭和32年東京大学教養学部文科系二年の男子学生を対象として，春のシーズンの終りである6月末，調査当日の正課体育の時間に体育教官の指導の下に，質問紙法を用いて実施，運動部員を除く，183名の回答を整理したものである。

2) 一般学生の課外スポーツ活動の実情

この調査の対象となった183名の学生は「スポーツが一般の学生の生活に必要だと思うか」という問題について，91.8%が「必要である」と回答し，「不必要」という回答はしなかったということをまず報告しておきたい。

(1) 春のシーズンにおける課外スポーツ活動

| | | |
|---|---|---|
| おこなった | 141 名 | 77 % |
| 何もやらない | 38 〃 | 20.7〃 |
| 無記入 | 4 〃 | 2.2〃 |

実施の程度（141名について）

| | | |
|---|---|---|
| イ．毎日のように | 17 名 | 12 % |
| ロ．週二回平均 | 48 〃 | 34 〃 |
| ハ．週一回程度 | 67 〃 | 47.5〃 |
| ニ．学内競技会丈 | 9 〃 | 6.3〃 |

というようなことで，学生々活にスポーツが必要であると理解しながらも日常余り活発に実践してはいないという実情であると解釈される。

(2) スポーツ活動をおこなったと回答した学生のうち，(ロ)，(ハ)，(ニ)，程度しか実践しなかった124名について，その理由をみると，

「暇がない」ということが最高の頻度を示しており，「適度と思うから」という理由がこれに次いでいる。

| | | |
|---|---|---|
| 暇がないから | 61 | 49.6% |
| 適度と思うから | 45 | 36.2〃 |
| 用具がないから | 14 | 11.2〃 |
| 金がないから | 4 | 3.2〃 |
| 身体が悪いから | 3 | 2.4〃 |
| 相手がないから | 20 | 16.1〃 |
| 場所がないから | 14 | 11.2〃 |
| 無記入 | 22 | 17.7〃 |

このような傾向が東大だけでなく他の大学にもみられるものか，各大学の実情についても承知するために東大の調査を原案として，東京周辺の明治，慶応，都立，教育大等国公私立 13 大学の学生について実施した課外部会の調査結果を引用すると，

対象となった男子学生 2278 名について「学生生活にスポーツが必要である。」とするもの 91.1% と大体同様の傾向を示しているが，スポーツ活動の実情については，

(1)　春のシーズンにおけるスポーツ活動

| | | |
|---|---|---|
| おこなった | 1388 名 | 61. % |
| 何もやらない | 781 〃 | 34. 〃 |
| 無記入 | 109 〃 | 5. 〃 |

実践の程度

(イ)　毎日のように 232 名 (16%) に対して，(ロ)，(ハ)，(ニ) 1088 名 (78%) 不明 68名(6%)

というようなことで，やはりスポーツの必要性について理解しながら実践の度合が余り高くない傾向をみせている。

(2)　(ロ)，(ハ)，(ニ) の理由についても，「暇がないから」ということが，600 名(55.1%) と最高の頻度を示して，「適度と思うから」という理由が，290 名(26.6%) とつづき，以下も大体同様の項目が列挙されている。

このようにして全体としては大略東大の場合と同様の傾向を示していることが承知されたのである。

## II　一般学生の課外スポーツ活動の問題点

1.　不振の理由について

学生が以上のように一応の理解と関心を持ちながら何故課外にスポーツを余り実践しないのかという問題に考えを進めてみると，結局先の (ロ)，(ハ)，(ニ)，の場合にあげられた，「暇がない」「適度と思う」「施設・用具がない」「相手がない」というようなことが理由として考えられる訳である。福岡学芸大の高崎氏のグループが九州の諸大学の学生を対象にして実施された課外スポーツについての調査でも，

○勉強その他で暇がない。

○機会がなかなか得られない。

○用具施設が不充分。

○金がかかりすぎる。

というような理由があげられていると報告[3]されている。また厚生補導専門研究集会で検討された結果，課外活動を阻害している要因は，学生の側においては，「認識，並に興味の不足」，「時間の不足」であると説明されたのである。

以上が一般学生の課外に余りスポーツ活動をしない理由として考えられるところである。

2.　時間の問題について

このなかで共通してあげられ，しかも高率を示している時間の問題については日常見聞する学生の生活から果してその通りであろうかと疑問視され，納得し難いのである。

そこで一般学生の生活時間についてみると東大の場合は学生部の調査によると，

○平日における教養学部学生の生活時間[2]

A.　睡眠・食事・入浴・休養等，10 時間

B.　読書・教養・娯楽・交際・スポーツ　2時間 15 分

C.　自習　3時間 15 分

ということになっており，課外部会の調査による東京周辺の国公立大学の学生もB項について少くとも 2～3 時間を使用しているのであるから，学生が本当にスポーツ活動をしようと思えば時間があるとも言い得るのではないだろうか。

3.　理由の検討

一般学生の課外におけるスポーツ活動が余り盛んでない理由の検討の予備的段階として，「何故

余り実践しないのだろうか」というテーマで，昭和32年の5月教養学部の学生50名に自由に書かせたところ，スポーツ活動をする為の用具・施設についての不足・不満をあげると同時に，

○何もしないでも病気にならないからわざわざやらなくてもよい。

○わざわざでかけていってやるのは面倒だ。

○スポーツは楽しむものだから気のむいたときにやればよい。

○大学生は学習が第一で，スポーツなぞする暇はない。

○教養を身につけなければいけないから文化活動をする方がよい。

といったスポーツ活動に対して消極的，或は否定的な意見をのべていたので，これらについて種々考慮の上，

① 健康の維持・増進に関連したこと。

② 課外生活に関連したこと。

③ スポーツについての興味に関連したこと。

④ 生活時間に関連したこと。

という4つの観点に整理し，それぞれについてスポーツ実践に反対，或は消極的な人が回答し易いように，とくにスポーツを実践するのには条件の遠ざかった意見，調査の結果をつけ加えて設問4題を作成し，学生のもっているスポーツについての理解と興味がどの程度のものであるか，何故あまりやらないのかという事情を追究してみようとしたのである。すなわち，

① 健康問題についてやらなくても病気にならないのだから，敢えて時間をつくってまでやる必要はないという意見があるがどう思うか。

② 教養・娯楽にむけられる時間が多くて，スポーツはレクリェーションとして時折実践される程度であるという調査の結果がでているが，貴方の場合はどうか。

③ スポーツは好きでも，実際にわざわざ時間をさいて，仲間をみつけてまでやる必要はないという説明についてどう思うか。

④ 学生々活は学習，アルバイト，又は趣味，娯楽に忙しくて，スポーツをする暇はないと思われるがどうか。

という内容の問題について，1年生としても学内の経験がかなり深くなっと思われる秋学期の最初の体育の時間に，1・2年の文科系の男子学生を対象に，体育教官の指導の下に質問紙法によって実施したのであるが，回答214名分について整理した結果は別表のごとく，

① 健康の面からの質問については，「やらなくてもよい」32.6%「やるべきだが事実は困難」23.3%ということで，とにかくやらない者が56%に達しており，「毎日やるべきだ」という意見をのべた者の中で〃だから毎日やっている〃と裏付けしているものは僅に10%内外で，残りは単に希望意見としての表明ではないかと疑問視されるのである。

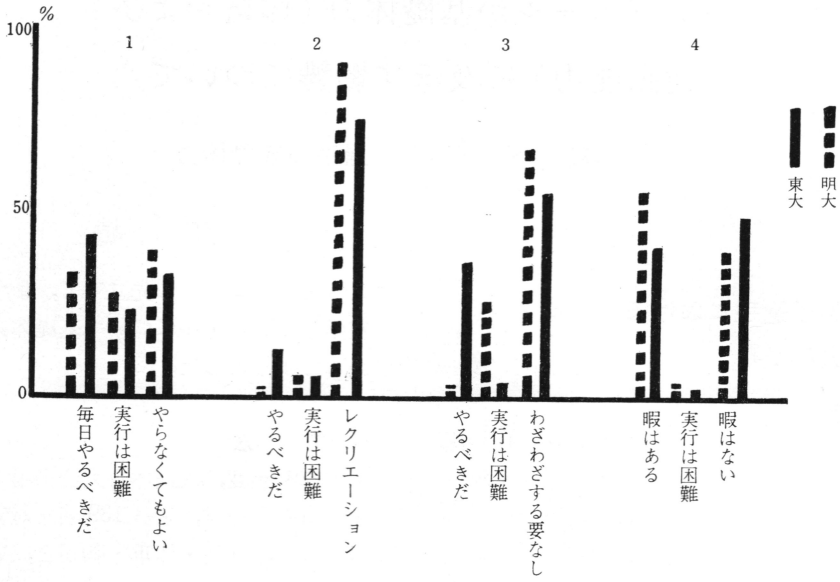
② 課外生活の内容からの質問については，「レクリェーションとして時折やればよい」という意見の者が74.7%と圧倒的に多い。

③ スポーツの興味と実践の程度についての質問に対しては，「仲間を集めて，時間をさいてもやるべきだ」という意見の者が36.6%に対して，「わざわざする必要はない」とする者が54.2%と半数を越している。

④ 学生々活時間からの質問については，「暇がないという者が49%をしめているが，そのうち学習，アルバイト或は通学時間の為に暇がないというのは僅に11%で，過半数(38%)は趣味・娯楽に時間がとられて暇がないというのであって，本人がスポーツを実践する気になれば時間的の面では可能な状態にあると考えられる。その上，「スポーツをする暇はある」という者が40.7%という結果である。

明治大学の商学部，政経学部の二年の男子学生について同時期に実施した調査の結果も第1図の通り殆ど同様の傾向を示している。

以上の結果を綜合してみると，学生の示した課外のスポーツに対する理解と関心の本質はかなり低いものではないだろうか，実践意欲もかなり弱いものではないかと解釈されるのである。然も余




第　1　図

りやらない理由のトップにあげられていた暇の問題も先に疑問視した通りで，多分に申し訳的な口実に使用される場合が多いのではないかと思われる。また，「適度と思うから」といった理由もこうしてみると体育についての理解と関心の不足からくる心理的なもので，それ程絶対的なものであるとは思われないのである。

したがって一般学生の課外スポーツについての問題点はむしろ「内面的には体育，乃至課外活動に対する理解と関心の不足」にあるのであって，外面的には，「施設・用具の不足」，次いでは「機会」，「相手」ということになるのではなかろうか。

東大の神田助教授が，その著「大学の体育」の中で，大学生の体育についての認識に対して，「学生の側においても，もっと自己の身体について，さらに自己の生活について健康的な注意が払われねばならないと考える。発育の完成期にある学生が自ら心身ともに健康的に充実する為に，体育に対する関心を一段と高める必要があることが痛感させられる。」[3] と言っておられるところはまさにこの内面的な欠陥を指摘したものであって，学生自身によく反省してもらわなければならないことであると同時に体育関係者が他の問題と共によく考慮して，如何に打開すべきか検討し，具体化することによって一般学生の課外体育についての解決をはからなければならないことがらであることは言うまでもないことであろう。

## III 結　語

一般学生の課外体育の問題については，これを管理・運営すべき大学の側からも論ずべきであろうが，今回は学生の側における活動の実情と，問題点について追究した結果を報告したのであって，現在の一般学生の課外におけるスポーツ活動は先述のごとく外見はかなりおこなわれているかにみえても，実際には実践すべき学生の認識が不足であり，同時に施設・用具についても不充分・相手にも，実践の機会にもめぐまれていないという理由で余り盛んではなく，今後これらの諸点について関係者が充分に配慮して打開の道を切りひらかなければならないのである。

### 文　献

1. 大学基準協会報 36 号 60 頁
2. 東大学生々活実態調査報告 (1957 年) 63 頁
3. 学生々活時報 12 号 1957 年 II 56 頁
4. 神田順治；大学の体育 52 頁